

柔道整復師が伝えていきたい柔術3流派

郡 佳子、大野 均、渋谷 昌孝、川崎 一郎

Three schools of Ju-jitsu, that Judo therapist would like to hand them on to the next generation

要約

柔術は柔道整復術の基礎となっている。柔術は武器を持った相手に対して素手で反撃する技術である。柔術を稽古することで柔術家は骨や関節の解剖的な位置関係や、相手の身体を操作するための適切な力加減を調節する能力を磨くことができた。また、柔術家に求められる心の修養によって、どのようなときも平静な気持ちで相手に相対することができた。このような心身の修養によって、柔術家は練習中の不意の怪我に対しても冷静に対処することができたと考えられる。

数多い柔術の流派の中でも「関口流」「起倒流」「天神真楊流」の三流派は、とくに柔道整復師にとってゆかりの深い流派である。関口流はそれまで「和」と書いていた「やわら」という言葉に対して「柔」という語を当て、「柔術」という言葉を初めて用いた。「起倒流」と「天神真楊流」は柔道を興した嘉納が学んだ流派であり、二つの流派の技は今でも柔道の形として受け継がれている。

はじめに

社団法人全国柔道整復学校協会が監修、同法人教科書委員会が編集した「柔道整復学理論編」には柔道整復術と柔術の関係について、以下の記載がある。

現在の柔道整復術は、(中略)わが国古来の武道とくに柔術のうえに構築された江戸時代の接骨の輝かしい伝統が基礎となっていることが特徴である。(p.6)

つまり、柔道の基礎となっている「柔術」が現在の「柔道整復術」の基礎となっているといえる。

従来柔道整復師には「柔道の相当の実力」が求められていた。しかし昭和45年の「柔道整復師法」の成立後は「柔道の素養」があればよいこととなり、柔道の経験が浅いままに柔道整復師になる者が増えた。そのため、柔道整復師を目指す学生は、柔道の歴史や柔道の身体の使い方を十分に学ぶ機会がないまま卒業するのが現状である。まして柔道の基礎となっている柔術の歴史や身体の使い方を学ぶ機会はほとんどないと言ってよい。

しかし、柔道整復師に求められる技術の多くは柔術の流れをくんでいる。そのため柔術について学ぶことは柔道整復師の技術を学ぶうえで有用である。

そこで本稿ではまず柔道整復師の基礎となっている柔術の歴史を簡単にふり返る。次いで、数多くの柔

術の流派のうち、特に柔道整復師にゆかりの深いと思われる3つの流派を取り上げ、解説を加える。

2 柔術と柔道

(1) 柔術の歴史

柔術は武道の一つとして生まれた。柔術の源流は竹内中務大夫久盛(1503 - 1595)がつくった竹内流小具足腰の廻とされる(藤堂, 2007)。もともとは戦闘中に太刀を紛失したり、奪取されたり、折れた場合等に、何も持たず素手で戦闘を継続するための技術として発達した。

柔術が流行したのは江戸時代である。それまでの武道の主流は剣術であり、相手を斬殺、刺殺するための技術として武士階級の間で発達した。それに対し、柔術が流行した背景としては天下を統一した江戸幕府が各藩に戦争を禁じたため、それまで武術の主流であった剣術が活躍の場を失っていき、武器を用いない柔術の修行も行う武士階級が増えたこと、また無法行為をはたらく野武士や浪人者に対する護身術として、武器を必要としない柔術が農工商に従事する町民たちに求められたことがある。

柔術には数多くの流派が存在する。以下に同朋舎出版の『日本武道大系(第六巻)』からいくつかの流派とそれぞれの特徴を記す。

1. 竹内流 史料が現存する日本最古の柔術流派。柔道の型制定に強い影響を与えた。
2. 小栗流 新陰流剣術より発生。土佐藩に伝承され坂本龍馬も学んだ。
3. 制剛流 水早長左衛門信正が高野山の制剛僧より伝与された組討技術。
4. 関口流 柔術名称の祖。修行過程の階位制度の祖であり合気道の源流。
5. 渋川流 関口流の系統で健康増進の思想をもつ。
6. 起倒流 鎧甲冑を身につけた相手を投げる技をもつ。講道館「古式の形」として現在も残る。柔道の体捌きや崩しの原型。柔道の源流。
7. 直信流柔道 脆弱に傾いた武道を儒教思想によって正そうと実理を唱えた。
8. 楊心流 絞め技・当て身、活法、整骨・医学知識に優れた。
9. 真之神道流 道場破りという概念をつくった。楊心流の系統。教義に陰陽五行や儒教思想を取り入れた。
10. 天神真楊流 柔道と合気道の元祖。楊心流と真之神道流が合流したもの。整骨や活法を伝承。
11. 扱心流 楊心流と起倒流が合流したもの。
12. 荒木流拳法 安土桃山時代に荒木夢仁斎源秀縄が創始。

柔術は武器を持った相手に対して素手で反撃する技術である。そのため武器を持った相手の攻撃をかわし、相手の身体機能を制御して抑制し、動きを停止させる技術が磨かれた。そのための体捌きや効果的な相手の身体の制御法が「形」稽古（同じ動作を何度も繰り返すこと）として修行されたのである。

(2) 柔術と柔道のつながり

明治維新後、武士階級の崩壊のため、武術は廃れ、柔術教授のみにて生計を立てている柔術の道場は少なかったようである。武術や家系が優秀な者の中には、幕府の講武所で教鞭を執るという立場の者もいたが、柔術道場の多くは整骨を生業とし、空いている畳の上、または置いてある物を片付けて稽古を行うという有様であった。当時の武道界は政府の保護のもとで伝統保存の対象となっていた！。

このような武道を取り巻く環境の中で嘉納治五郎が

新しい武道の流派を興した。それが柔道である。

嘉納は、明治10年、創立当時の東京大学文学部に入学した。体を鍛えたいという理由で、柔術道場を探し、日本橋元大工町の「天神真楊流 福田八之助」道場に入門した。明治12年8月、福田八之助師が亡くなり、神田お玉ヶ池の「天神真楊流 磯正智」道場に転入した。しかしその磯正智師も2年後の明治14年に亡くなったので、明治14年6月、幕府講武所教授「起倒流 飯久保恒年」師に師事した。明治15年2月には下谷北稲荷町永昌寺を間借りし、飯久保恒年師を招いて稽古を継続した。同年5月23歳の時、永昌寺道場を増築し「講道館柔道」を興した。これが現代の柔道の始まりである。

3 柔術家と整骨業を結びつけたもの

嘉納が柔術を習った当時から柔術家の中には整骨を生業とする者がいたようである。嘉納の自叙伝『私の生涯と柔道』の中には「柔術の師匠を探していたのだが、ふと整骨をする人が昔の柔術家の名残なのだということを知り込んだから、整骨の看板のある処にはあちらにもこちらにも這入って見て、柔術をするか否かをきいて見た。」とある。

では、柔術家と整骨業を結びつけたのは何だったのだろうか。それは柔術家の武道家としての身体操作および精神修養が骨折や脱臼の整復に必要な能力の涵養に役立ったからだと考えられる。

(1) 整復に求められる能力

骨折や脱臼を整復する際に必要な能力を三つ挙げる。

一つめは骨や関節の解剖的な位置関係を把握する能力である。二つめは力の入れ加減を判断し、調節する能力である。三つめはどんな物事にも動じず、正しいことができる能力である。

一つめの骨や関節の解剖的な位置関係を把握する能力とは、体表からは直接観察できない皮下の骨の状態を三次元的に想像して把握する能力のことである。例えば、骨折や脱臼を整復するには、皮下で骨折した骨がどのようにになっているか、あるいは脱臼した骨頭の位置がどこに転位しているのかを3次元的に頭に思い描くことが必要である。明確に思い描くことができなければ、直接観察することのできない皮下の損傷を整

復することは不可能である。

二つめの力の入れ加減を判断し、調節する能力とは骨折や脱臼の程度に応じて力加減や力を入れる方向を瞬時に調節する能力のことである。例えば骨折した患者や脱臼した患者は痛みや不安のあまり、患肢を守ろうとして力を入れがちである。そのような患者を整復する際には、患者をうまく説き伏せ、あるいは患者の力が抜けた瞬間を見極めて、適切な力を適切なタイミングで適切な方向に加えることが必要である。つまりただ力が強いだけでは整復はできないのである。

三つめのどんな物事にも動じず、正しいことができる能力とは、いつ何時でも、どのような患者でも治療するという医療従事者としての心構えである。柔道整復師はどのようなケガで患者が来院しても常に平常心で診療に当たれるよう、気持ちの準備をしておかなければならない。例えば患者の痛がる顔を見て共に怯むようであれば、痛みを伴う整復動作をすることはできないであろう。あるいは患肢の腫れや変形を見ても冷静な気持ちで対処できなければ、正確な整復を行うことはできない。正確な整復動作を行うためには、どのようなケガにも動じない平常心と、どのような患者でも治療するという博愛精神が必要である。

このように柔道整復師が骨折や脱臼を整復する際には、骨や関節の解剖的な位置関係を把握する能力と力の入れ加減を判断し、調節する能力、およびどんな物事にも動じず正しいことができる能力が必要である。

では、柔道整復師の基礎となった柔術においては、なぜこれらの能力が発達し得たのであろうか。

(2) 柔術の技術

ここでは柔術の技術を挙げて、骨や関節の解剖的な位置関係を把握する能力と力の入れ加減を判断し、調節する能力が柔術において発達し得たのかを考えてみる。

関口流に『柔術型図画』という伝書がある。この伝書の中には柔道や合気道の技術の原型についての記載が存在する。例えば合気道の「小手返し」が「奏者捕り」「赤首」、あるいは柔道の「大外刈」が「前後の投げ」、また柔道の「一本背負い」が「行連」という名称で記載されている。

この「小手返し」の原型である「奏者捕り」は、相手の小手、すなわち相手の手首を自分の両手で左右からつかみ、自分の両母指で相手の甲を押して手首を曲

げ、自分の身体を捌いて相手の身体を倒す技である。この技を習得するためには、手首周辺の骨（橈骨、尺骨、手根骨）の位置や、両母指を押しつける中手骨の位置を正確に把握しなくてはならない。また回旋操作によって相手の手関節を極めるため、手関節の動きや可動域について熟知していなければならない。骨や関節の解剖的な位置関係を把握する能力は、形稽古や乱



図1 関口流「柔術型図画」より奏者捕の図

取稽古を繰り返すことによって自然と身についていったと考えられる。図1

「扱取（もぎとり）」という技は、短刀を持って切りつけてきた相手の短刀をもぎ取って奪う技である。相手が右手に短刀を持ち斬りつけて来た際、自分の左手甲で外に受けつつ、相手の右手を掛け取る。次に右足を一步前を出して相手の右鎖骨に自分の右手掌で当て身をする。そして相手の右手甲を右手で抑え掴み、右脚を大きく後方に引き込みながら、その手を下方に落とし右手で相手の短刀をもぎ取る。扱捕を習得するためには武器を持った相手の勢いを上手く殺しつつ、相手の勢いを利用する術を学ばなくてはならない。相手の勢いに応じた動きや力の入れ加減を身につけることが必要なのである。

これらの技は一步間違えば怪我の原因となりうるものであり、実際に柔術の稽古中は怪我が絶えなかった。従って、その怪我の手当をしながら稽古を続けていくことが柔術稽古の常だったのである。その際には日頃稽古で身についた骨や関節の解剖的な位置関係を把握する能力と力の入れ加減を判断し、調節する能力が活きたと考えられる。



図2「天神真楊流柔術極意教授」より扱取の図

(3) 柔術の思想

次に、どんな物事にも動じず正しいことができる能力が柔術において発達し得たのかを柔術の思想から考えてみる。柔術は剣術より派生したため思想も同等となる。

柔術は、武器をもたない「無手の武術」であったがために、動じない心をもって正しいことをすることが修行において大事である、という思想があった。さまざまな流派の伝書にその思想が記されている。

起倒流において修行者に最初に与えられる伝授巻(巻物)を「本躰」という。武道体系第六巻には「本躰」について以下のように書いてある。

本躰は体之事理也。専ら形を離れ氣を扱う。正理を己に得ざれば氣を扱うことを知らず。静貌至る所静氣を得て敵の強弱能く徹す。強弱通達すれば、則ち千変万化、敵を制せざる無し。是れ則ち虚実中る。本を偽るは、躰之正を務むるのみ。故に本躰と云う尔。(p.372) つまり「本躰」とは真の身、すなわち正体のことである。起倒流では人間本来の姿(自然無心の本体)に帰一する修行を根本とし、体を正しく保ち、私

心を去って心を正しく保つことを第一の務めとし、躰と邪智を去った本心を保てば敵にたいしても千変万化できるとして、この本躰を守る修行が大事とされた。(藤堂, 2007; 小佐野, 2001)

また、起倒流「天巻」は「不動智」について以下の記載がある。同じく武道体系第六巻より引用する。

敵に対するに爰に敵ありと、念の起る時は動ずるもの顕る。動ずる至ては一身むなし。

敵とみて、しかも心不動、虚靈にして、安く対する処、本躰そなわれるなり。是不動智と云。平生の神気不動の工夫熟得肝要也にして敵に対すれば、敵氣をのまれて迷う。ここを先を取とも云。たとへば敵より先にとりつきても、我神気不動なれば、敵速に事をなすことあたわず。(p.373)

不動智とは少しも敵に対して動揺しない神気不動の心のことをいう。禅僧沢庵が柳生家のために著した「不動智神妙録」に影響を受けている。

また、天神真楊流は「不動心」として以下のように記している(小佐野, 2001)。

不動心はうごかざる心也、心正明にして惣身へ氣満渡りて、白剣を眼で見ても心に不見、或者、大筒の音を耳に聞ても心に不聞して、物毎にとふとふ動かざる所なり。是を大丈夫といふ。此心をうごかして千変万化の業を自在にする時は、幾千万の大敵といふも、とふとふ動かざる所の心をさして不動心の位といふ也。(p.70)

天神真楊流においても敵に対して動揺しない心が大切とされている。

このように柔術においては相手の動きを見極め、相手を制するための身体操作法だけでなく、心の修養が重視されていた。いついかなる場合でも平静な気持ちで相手に向かい合うことのできる心が大切とされたのである。

4 柔道整復師が伝えていきたい柔術3流派

江戸初期より柔術家が実践や稽古の中で工夫発展させてきたものが、「柔道整復術」の基礎となっているといえる。数ある柔術流派の中から、柔道整復師に特

にゆかりの深い3つの流派を選び、それぞれの特徴を記す。関口流は柔道の「柔」という語を、「やわら」と読ませ、柔術の名称をつくった。起倒流と天神真楊流は柔道を興した嘉納が修行した流派である。

(1) 関口流

関口流は、関口彌六右衛門氏心（うぢむね）が、1619（元和5）年～1625（寛永2）年頃に興した柔術流派である。

関口氏心は、1597（慶長2）年に生まれ、青年期には剣や槍、軍学などを学んだ。1619（元和5）年に江州膳所藩本田康俊（大和郡山の本多家とも）に仕え、1622（元和8）年に紀州藩徳川頼宣に庇護され、柔術師範となった。

氏心は、長く一師について修行したのではなく、各種各流派を渡り歩き、さまざまな武道の技術を統合編成し、一流派を築いた。居合は林崎甚助、組討は三浦与次右衛門に習い、竹内流柔術の返し技まであるからだという理由で、竹内流を学んでいたのではないかと考えられている。一説には十八流派を修得していたと書いてある資料もあるが、真実は不明である。

関口流で学ぶものは太刀、小刀、槍術、柔術、捕縛、軍学など、多岐にわたる。『撃剣叢談』巻五には「この新心流には、居合、太刀、柔の三つにもとづきて、捕手の傳、心得の条々、軍中の傳等に至るまで、数々の相傳することあり。」とあり、関口流では剣技が基礎となり、柔組討に至ることが察せられる。関口流の伝書には『関口流柔誘引書』『関口流柔目録』『柔変裏難躰勝方覚書』『柔術形図画』『柔新心流伝書』等がある。

「柔」を「やわら」と読ませるようになったのは関口氏心が最初であったという。それまでは柔術のことを小具足と呼んだり、「和」と書いて「やわら」と読ませていたものを、「柔」を「やわら」と読ませるようになったと本人が記している。『関口流柔誘引書』には次のようにある。

それ世に云うところの柔は、ただ和らかなものを柔とす。当流の柔は左にあらず。楊柳をもって柔とす。楊柳は死物にあらず、和らかにして陽を含めり。去によって生物なり。楊柳は、物に应じてさからわず、したがわず、来るものにつれてつくる所に於いて本体に帰るものなり。(p.152)

関口流においては「柔」とはただやわらかなものを

いうのではなく、楊のことというものである。楊とは物によって形をかえても、また元に戻る強くてしなやかなものである。としている。

また、柔術という名称が使われるようになったのは関口流が初めである。『武士訓』には「慶安以来、柔術の妙技は曾て唐土にもなく紀州関口柔心、独り柔能制剛の理を悟り初めて其の術を工夫し柔術と名付けた」と記されている（藤堂, 2007）。

(2) 起倒流

起倒流は、茨木専斎俊房（いばらきせんさいとしふさ）が、1637（寛永14）年頃に興した柔術流派である!!!。茨木俊房は柳生家で修行し、柳生宗矩・柳生三厳・禅僧沢庵に師事した。主に柳生家伝新陰流無刀之位を稽古修行していたと推察される。徳川幕府において剣術指南役を司っていた柳生より出た流派といえる。

柳生一門からは起倒流以外にも柔術流派が生まれている。柳生宗厳は「柳生新陰流」において刀を持たずに相手の剣術を制する「無刀之位」を完成させたからである。そのため、茨木専斎俊房と同じく柳生一門であった福野七郎右衛門正勝も「良移心当和（りょういしんとうやわら）」を興している。素手で操刀の者を制する工夫が流派となって華開いたのである。

起倒流の特徴は、鎧組討・投技中心であるということである。当時はまだ甲冑着用での稽古が行われていた。高重量の人間をいかにして投げ倒すかという工夫が、現在の柔道の投げ技の中に脈々と生きているのである。嘉納は「起倒流の形」が技術的にも理論的にも優れているとして柔道の「古式の形」として残している（藤堂, 2007）。

起倒流の伝書には『天巻』『地巻』『人巻』『本體』『性鏡』などがある。



図3「柔道の歴史と文化」より起倒流の形

(3) 天真真楊流

天神真楊流は、磯又右衛門柳関斉源正足が、1839（天保10）年頃に興した柔術流派であるiv。

磯正足は、1804（文化元）年に生まれ、15歳にて「楊心流 一ッ柳織部義路」に入門した。7年後、師の死去により「真之神道流柔術 本間丈右衛門正遠」に入門し、その6年後には楊心流と真之神道流を統合し、新たに「天神真楊流」を興したv。1839年頃には、江戸に出て、神田お玉ヶ池に道場を開いた。諸国の藩士ら入門者が五千余名にも及んだそうである。1863（文久3）年、60歳で亡くなるまで後進育成に尽力した。

天神真楊流は幕末期につくられた流派であったため、稽古は普段着で行われ護身術として広まった。嘉納の柔術修行の始まりはこの天神真楊流である。柔道の「極の形」には天神真楊流の形の影響が濃い（藤堂、2007）。

ちなみに天神真楊流という名称に使われている「楊」は柔（やわら）の意味で用いられている。柔術においては「楊」は代表的なシンボルである。

木偏か手偏かで違うが『関口流柔誘引書』によれば「それ世に云うところの柔はただ和らかなものを柔とす。当流の柔はさにあらず。楊柳を以て柔とす。楊柳は死物にあらず、和らかにして陽を含めり。さによって生物なり。楊柳は物に応じてさからわず、したがわず、来る者につれてつくる所において本體に帰るものなり」と、楊の語を重要視している。

山本英早が1779（安永8）年に記した真之神道流柔術『上檀卷』中にも「謂らく楊柳風に靡くを觀て、和徳大悟之一如為るを得、真之神道流と号づく」とある。

身体を柔らかく使えば、剛堅にして使うよりも効果が上がるということを「楊」の字を用いることで表現したのではないだろうか。

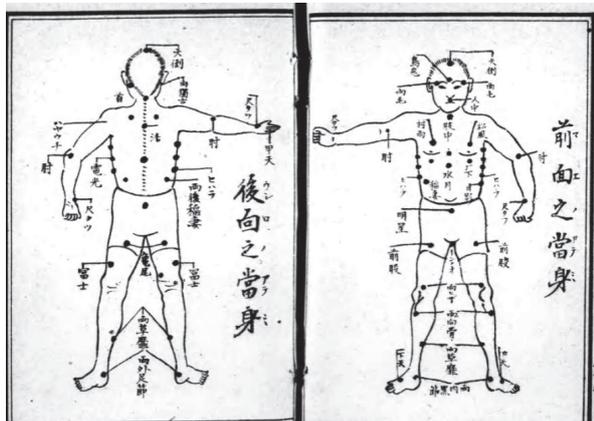


図4「天神真楊流柔術極意教授」より当て身の図

5 まとめ

武器を持った相手に対して素手で反撃する技術である柔術を稽古することで、柔術家は骨や関節の解剖的な位置関係や、相手の身体を操作するための適切な力加減を調節する能力を磨くことができた。また、柔術家に求められる心の修養によって、どのようなときも平静な気持ちで相手に相対することができた。このような心身の修養によって、柔術家は練習中の不意の怪我に対しても冷静に対処することができたと考えられる。

数多い柔術の流派の中でも「関口流」「起倒流」「天神真楊流」の三流派は、とくに柔道整復師にとってゆかりの深い流派である。関口流はそれまで「和」と書いていた「やわら」という言葉に対して「柔」という語を当て、「柔術」という言葉を初めて用いた。「起倒流」と「天神真楊流」は柔道を興した嘉納が学んだ流派であり、二つの流派の技は今でも柔道の形として受け継がれている。

このように柔術は柔道整復術の基礎となっている。しかし柔術について十分に学ぶ機会を持たないまま、養成校を卒業する学生が多いのが現状である。今後も柔道整復術の歴史を研究し、柔術、およびその歴史を後進に伝える一助としたい。

i 講武所では、剣術、槍術、柔術などの様々な流派が違いに研鑽しあひながら、流派存続だけでなく、日本武道の伝承を目的に講義していた。

ii 初代・関口弥六右衛門氏心 - 2代・八郎左衛門氏業 - 3代・万右衛門氏英

4代・弥太郎氏暁 - 5代・万右衛門氏一 - 6代 外記氏元 - 7代・万平氏記

8代・万右衛門氏敬 - 9代・万之丞氏賛 - 10代・柔心氏胤 - 11代・万平氏柔

12代・芳太郎氏中 - 13代・関口芳夫氏広（現宗家・和歌山県）

iii 系譜は、流祖・茨木専斎俊房 - 2代・寺田勘右衛門満英（直心流柔道の祖）

3代・吉村兵助扶寿 - 4代・堀田左五右衛門 - 5代・滝野専右衛門貞高 - 6代・藤堂安貞

A 7代・鈴木清兵衛邦教（乱取稽古の祖） - 8代・松平越中守定信 - 9代・水野若狭守忠通

B 7代・竹中元之進 - 8代・竹中鉄之助一清 - 9代・飯久保恒年 - 10代・嘉納治五郎

現在も、財団法人日本武道館日本古武道協会主催の日本古武道演武大会に出場されたり、日本古武道協会主催厳島神社古武道演武大会、京都武道大会にも出場されたりしている。

稽古場及び支部は、東京都文京区総合体育館柔道場や、京都府柔道整復師会館4階道場で稽古をされているようである。

iv 系譜は、流祖・磯又右衛門柳関斉源正足 - 2代・磯又一郎正光 - 3代・磯又右衛門正智

A 4代・磯又右衛門正信 - A 5代・磯又右衛門正幸

B 4代・井上敬太郎 - B 5代・戸張滝三郎 - B 6代・戸張和（現在・大阪府）

- C 5代・宮本半蔵 - C 6代・相宮和三郎

D 4代・戸沢徳三郎 - D 5代・植芝盛平（合気道開祖）

E 4代・福田八之助正義 - E 5代・嘉納治五郎（講道館柔道開祖） - E 6代・福田梅子

現在では久保田敏弘先生が埼玉県新座市にて、戸張和先生が大阪市西天満で、柴田孝一先生が埼玉県川越市で指導されている。

v 「揚心流」は貞享年間（1684～1687）、秋山四郎左衛門義時という長崎の医師であり武道家が興した

流派である。一方、三浦揚心という長崎の医師が、武田家に伝わる「大陰流柔術」を伝与され、興したのが「揚心流」だという説もある。

引用文献

老松信一 植芝吉祥丸 『日本武道大系 第六巻』 (株)同朋舎出版 1982年

小佐野 淳 『図説 柔術』新紀元社 2001年
社団法人全国柔道整復学校協会監修 『柔道整復学理論編』改訂第5版 南江堂 2009年

藤堂良明 『柔道の歴史と文化』不昧堂 2007年

参考文献

嘉納治五郎 『嘉納治五郎 私の生涯と柔道』 日本図書センター 1997年

渡辺一郎 『武道の名著』東京コピー出版部 1979年

『日本武道辞典』笹間良彦 柏書房 2003年

『武道伝書を読む』湯浅晃 日本武道館 2001年

日本古武道協会 『日本古武道総覧』 島津書房 1997年